福井県英語学習 CAN-DO リストの作成

―小中高で系統性・統一性のある到達目標の設定に向けて―

調査研究部英語ユニット

木下　弥　吉村美幸　川崎美和

文部科学省は平成 25 年３月に「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」を公表した。CAN-DO リスト形式で目標設定を行う大きな目的は、指導と評価をコミュニケーション能力育成のためのものに変えていくことにある。そこで、各校、各校種で作成している CAN-DO リストの系統性や統一性を確保するためには、その作成の基準となる参照枠としての CAN-DO リストが必要であると考え、小中高一貫した福井県英語学習 CAN-DO リストの作成に取り組んだ。

〈キーワード〉　CAN-DO リスト、到達目標、小中高一貫、CEFR-J

Ⅰ　作成の背景

平成 25 年３月に、文部科学省は「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」を公表し、各校で各学年の到達目標を CAN-DO リスト形式で設定していく方針を示した。CAN-DO リストとは、英語を使って具体的に何ができるかという視点で目標を記述し、リスト化したものである。

各校において CAN-DO リスト形式で目標設定を行う大きな目的は、指導と評価を語彙や文法の定着を図るものからコミュニケーション能力育成のためのものに変えていくことにある。これまでの指導は言語知識の習得が目的になりがちであったが、目標を「英語を使って～できる」という記述にすることによって、実用的な英語運用力の育成を目指した指導改善を図っていくことが必要になる。評価も、使える英語として「実際にできるようになったか」を測ることになるので、指導と評価の一体化が進むことになる。つまり、CAN-DO 形式で目標設定することで、学習指導要領が求める４技能の総合的な指導によるコミュニケーション能力の育成が可能になると期待されるのである。

福井県では、手引きの公表を受けて、各中・高等学校で各学年の学習到達目標を CAN-DO リスト形式で作成し、指導と評価の改善に向けての取組みを始めたばかりである。しかし、作成にあたり参照できるモデルがあるわけではなく、各校で試行錯誤しながら作成した独自のものであり、統一性があるとは言えない。

各校が児童・生徒の実態に合わせた到達目標を設定することが大事ではあるが、各校・各校種で統一性や連続性のある到達目標リストを作成することによって、新しい英語教育のための指導改善を図っていくことができるのではないか。そこで英語ユニットでは、各校で CAN-DO リスト形式の学習到達目標を作成する際の参照枠として、福井県英語学習 CAN-DO リスト（以下、県 CAN-DO リスト）を作成することにした。各校で目標とするレベルを参照枠のレベルに関連付け、記述文を反映させることで、各校・各校種の目標に統一性や系統性が生まれる。現在は各小学校において CAN-DO 形式の到達目標は作成されていないが、小学校段階も含めて県 CAN-DO リストを作成することで、現行の外国語活動で「話す」「聞く」を中心とした活動を通して児童に身につけさせたい力の目安を意識することができる。そのことは、小中が連携した指導改善にもつながり、また今後の小学校での外国語活動の教科化に向けても対応がで

きると考えた。

Ⅱ　作成第１期

１　作成の方針

県 CAN-DO リストの作成にあたっては、既存の CAN-DO リストを基にすることにした。外国語学習者用の代表的な CAN-DO リストとしては、ヨーロッパを中心に普及している CEFR(Common European Framework of Reference for Languages:欧州言語共通参照枠）があり、それを基に日本の英語学習環境を想定して作成された CEFR-J がある。国際的に使用されている CEFR に準拠しつつ日本の状況に合わせて作られていること、記述文のレベル設定が検証を経ていて信頼性があることから、CEFR-J を基に作成することにした。CEFR-J は児童・生徒だけでなく大学生や成人の学習者も対象にしていることから、記述文中の題材や活動は一般化されており、児童・生徒に関わりの薄いものも含まれている。児童・生徒になじみやすいものにするために、CEFR-J の記述文を学校で使われる教材や指導内容に合わせたものに変えることを作成の方針とした。

２　作成の過程

まず、小中高それぞれの担当者で、CEFR-J の各校種に該当すると思われる段階の記述文を、使用教材の言語材料や指導内容に合わせて改編することにした。小学校は教科化を視野に入れて読み書きも対象にした。CEFR-J ガイドブックの記述等から、小学校は Pre-A1（「話すこと」のレベル：極めて限定的な日常の挨拶と意思伝達）から、中学校は A1.1（「話すこと」のレベル：学校生活での会話）から、高校は A2.2（「話すこと」のレベル：学校以外の社会生活での会話の導入）からを対象とした。教材は、小学校は外国語活動の教材である *Hi, friends! 1,2* を、中学校は全県で採択されている教科書の *New Horizon English Course* を参考にした。高等学校は共通教材がないため、英語表現Ⅰ、Ⅱの教科書３社分を取り上げ、「話すこと」「書くこと」の言語活動を参考にした。以下に改編の例を挙げる。

	発表
A1.3	前もって発話することを用意した上で、限られた身近なトピックについて、簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い、複数の文で意見を言うことができる。
	前もって発話することを用意した上で、日常生活に関する簡単な事実を、簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い、複数の文で描写できる。

図１　CEFR-J

	発表
A1.3	簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用いて、複数の文で、限られた身近なトピック（ある人物や学校生活など）について簡単な意見を言うことができる。
	簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用いて、複数の文で、日常生活に関する簡単な事実（場所や時間、持ち主、何をしているかなど）を描写することができる。

図２　県 CAN-DO リスト

記述文に教材の内容を当てはめていったところ、小学校は A1.2～A1.3 まで、ただし「聞くこと」は B1.1 まで該当することになった。中学校は B1.1～B1.2 までになった。

高等学校は、教科書によって A2 より低いレベルのトピックや活動が多く扱われていたり、逆に B2 より高いレベルのトピックや活動が扱われているが、現状の到達度との乖離が見られるなどして、どこまで扱うか検討を要した。結局、B1.2 レベルまでは、教科書に内容が出てこなくても到達すべきレベルであると考えられること、B2.1 の記述文が、現状の到達度から見てかなり高度なレベルを扱っている（たとえば「発表」は「ディベートなどで、そのトピックが関心のある分野のものであれば、論拠を並べ自分の主張を明確に述べることができる」）ことから、B1.2 レベルあたりまでを対象にすべきとした。

記述文によって幅広い解釈が可能であること、同じトピックや活動でも様々なレベルに該当し得ることから、ある教科書内容がどのレベルに該当するか判断するのは困難だった。例えば、小学校の *Hi,*

friends! 2 Lesson 5 にある外国紹介のレッスンが、「聞くこと」の B1.1 の記述文「外国の行事や習慣などについての説明の概要を、ゆっくりはっきりと話されれば、理解することができる。」に文言上当てはまると考えられたことである。実際は、B1 は高校卒業・大学レベルとされているため、この設定は高すぎる。記述文のトピックや活動を表す文言にとらわれるのではなく、各段階のレベル感をつかむことが重要であると考え、CEFR-J の解説書や CEFR 準拠のもう１つの日本版 CAN-DO リストである Japan Standards などの資料を基に、各段階が表すレベルを再確認し、修正した。

Ⅲ　第１回 CAN-DO リスト研究会

CEFR-J の開発者である東京外国語大学大学院の投野由紀夫教授を研究アドバイザーとしてお招きして、第１回 CAN-DO リスト研究会を行った。主に CAN-DO リストの基本と、参照枠 CAN-DO リストを基にした各校 CAN-DO リストの作成法についてご教授いただいた。

県 CAN-DO リストは途中経過を見ていただいた。CEFR-J の記述文を使用教材の言語活動に合うように修正した点については概ね了承された。研究会の中で、CAN-DO リストの基本として、記述文には「何をするか（行為）」「どんな場面や状況でするか（トピック、場面、記事のジャンル）」「どの程度するか（文法・語彙の程度、自力でできる度合い）」という３要素が必要であること、３要素のどれかが抜けた記述文は曖昧になることを教えていただいた。例えば、「限られた身近なトピックについて意見を言うことができる。」という記述文には、行為しか書かれていない。「前もって発話することを用意した上で（どんな場面・状況で）、限られた身近なトピックについて、簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い、複数の文で（どの程度）意見を言うことができる。」と書くことで３要素がそろうことになる。

	発表
A1.3	簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用いて、複数の文で、限られた身近なトピック（ある人物や学校生活など）について簡単な意見を言うことができる。
	簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用いて、複数の文で、日常生活に関する簡単な事実（場所や時間、持ち主、何をしているかなど）を描写することができる。

図３　研究会前の県 CAN-DO リスト

「どのような状況で」（condition）を付け足した

	発表
A1.3	○日常生活の事実や限られた日常のトピックについて、前もって発話することを用意した上で、 ・簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い、複数の文で ・描写したり、理由も含めて述べたりできる。

図４　研究会後の改訂済み県 CAN-DO リスト

県 CAN-DO リストの記述文にも３要素がそろっていないものがあることを指摘された。

１　記述文の３要素

①　どのようなタスクができるか

②　どのような言語の質でできるか

③　どのような条件下でできるか（投野 2013）

この３要素が具体的に示すものは、受容技能、発表技能の記述文において、次のようになる。

受容技能（聞く・読む）：（１）task　（２）text　（３）condition

発表技能（話す・書く）：（１）performance　（２）quality　（３）condition　（根岸 2010）

２　各段階が表すレベルの目安

CEFR-J の各段階が表すレベルは、現状と政府が 2020 年に目指している目標について、以下のように示された。

語彙レベル	現状		2020 年の政府の目標
A1　1,000 語レベル	中２レベル	→	小３～６レベル、中１で復習

A2　2,500 語レベル　　高２レベル　　→　中２、３レベル
B1　5,000～6,000 語レベル　大学受験レベル　→　高１、２レベル
B2　7,000～8,000 語レベル　英語圏の大学英語で専門分野の学習ができるレベル　→　高３レベル

３　活用法について

各校での参照枠の活用法についてもご教授いただいた。

(1)　県 CAN-DO リストを参照枠とした各学校版 CAN-DO リストの作成

各学校が児童生徒の実態に合わせ、卒業時の学習到達目標を県 CAN-DO の記述文を使い、具体化していくとよい。

(2)　各学年、各学期、各単元、各時の到達目標への細分化

教科書の内容を県 CAN-DO リストの記述文に合わせて落とし込んでいくとよい。その際、CAN-DO 記述文には３要素を入れることが必要である。３要素を入れることで、文法や本文理解が到達目標ではなく、それを知識として「～ができる」という目標にすることができる。

Ⅳ　作成第２期

１　作成の方針

研究会での学びを基に、作成の第２期は、次の２つに力点を置いた。

①　校種ごとのレベルを見直し、各記述文の内容を校種ごとに再編成する
②　各レベルの記述文にはっきりとした３要素を入れる

２　作成の過程

まず、①については、研究会で示されたレベルの目安から、小学校 Pre-A1～A1.1、中学校 A1.2～A2.1、高校 A2.2～B1.2 を標準レベルとして定めた。そして、CEFR-J の原文に戻り、レベル感に合わせて、各校種の内容に合うように記述文の再編集を行った。作成過程で問題になっていたのは、レベル感の把握の難しさである。CEFR-J のある段階から次の段階で、できることがどう変化していくかを見て、それぞれの段階が表しているレベルのイメージを確認した。

例として、図３の CEFR-J「読むこと」の A.1.3 と A.2.1 の記述文を比べる。

	読むこと
A1.3	簡単な語を用いて書かれた、スポーツ・音楽・旅行など個人的な興味のあるトピックに関する文章を、イラストや写真も参考にしながら理解することができる。
	簡単な語を用いて書かれた、挿絵のある短い物語を理解することができる。
A2.1	簡単な語を用いて書かれた人物描写、場所の説明、日常生活や文化の紹介などの、説明文を理解することができる。
	簡単な語を用いて書かれた物語や伝記などを理解することができる。

３要素に分解すると以下のようになる。

・Condition：A1.3「簡単な語を用いて書かれた」
　　A2.1「簡単な語を用いて書かれた」
・Text：　A1.3「スポーツ・音楽・旅行など個人的な興味のあるトピックに関する文章を」
　　A2.1「人物描写、場所の説明、日常生活や文化の紹介などの、説明文を」
・Task：　A1.3「イラストや写真も参考にしながら理解することができる。」
　　A2.1「理解することができる。」

図５　CEFR-J

Textの要素において、A1.3で身近で個人的な話から、A2.1で日常的でより広い話題に発展していることが分かる。また、Taskの要素において、A1.3で視覚的な補助を使う段階から、A2.1で文字だけで理解する段階へ発展していることが分かる。記述文を単独で読むのではなく、縦に比較することで、レベル

がイメージしやすくなる。また、３要素に注目して比較すると差が明らかになる。このようにレベルの再分析をし、各校種でレベルの積み上げを意識した記述文の再編集を行った。

次に、②については、CEFR-J の記述文は１文が長く、１文中の３要素の記述順にもあまり統一感がなく､そのことがレベルを把握しにくい一因になっていたと考えられることから､記述文を３要素に分け、箇条書きで統一した順序ではっきりと示すことにした。順序は表１のとおりである。

表１　３要素の記述の順序

受容技能（聞くこと・読むこと）		発表技能（話すこと・書くこと）	
①　condition	どのような条件で	①　condition	どのようなもの・状況なら
②　text	どのような内容のものを	②　quality	どのような言語の質で
③　task	どうすることができるか	③　performance	何を行うことができるか

また、CEFR-J では１つの段階につき記述文が２文ずつ、別々の枠に記載されていたが、県 CAN-DO リストでは段階としてのまとまりを強調するために１段階１枠とした。記述文は統合できるものは統合した。以下に、３要素の箇条書きと記述文の統合の例を挙げる。

	読むこと
A1.2	簡単なポスターや招待状等の日常生活で使われる非常に短い簡単な文章を読み、理解することができる。
	身近な人からの携帯メールなどによる、旅の思い出などが書かれた非常に短い簡単な近況報告を理解することができる。

図６　CEFR-J

	読むこと
A1.2	○日常生活で使われる非常に短く簡単な ・ポスター、招待状、メールなどのメッセージや文章を ・読み、理解することができる。

図７　福井県 CAN-DO リスト

「○」「・」「・」の順で、３要素を記述している。

また、CEFR-J は５技能だが、学校では４技能が一般的なので、「やりとり」と「発表」を「話すこと」に統合した。記述文は取捨選択、統合を行った。以下が統合の例である。

	やりとり	発表
A1.2	基本的な語や言い回しを使って日常のやりとり(何ができるかや色についてのやりとりなど)において単純に応答することができる。	前もって発話することを用意した上で、限られた身近なトピックについて、簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い、簡単な意見を言うことができる。
	スポーツや食べ物などの好き嫌いなどのとてもなじみのあるトピックに関して、はっきり話されれば、限られたレパートリーを使って、簡単な意見交換をすることができる。	前もって発話することを用意した上で、日常生活の物事を、簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い、簡単に描写することができる。

図８　CEFR-J

	話すこと
A1.2	○日常生活の物事について ・前もって発話することを用意した上で簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い ・簡単に描写することができる。 ○日常のやりとり(何ができるかできないか、スポーツや食べ物の好き嫌いなど)において、はっきり話されれば ・基本的な語や言い回しを使って ・理由なども含めて応答することができる。

図９　福井県 CAN-DO リスト

上段が発表の内容で、下段がやりとりの内容になっている。また、「意見を言う」や「意見交換をする」という内容を「理由なども含めて応答する」とまとめた。

Ⅴ　第２回 CAN-DO リスト研究会

第２回も、前回と同じく投野由紀夫教授をお招きして行った。新しく作成した CAN-DO リストも踏まえ、さらに得られた知見は以下の通りである。

1　作成したCAN-DOリストについて

小中高で使用している教科書で扱う題材などとも対応しており、大枠として仕上がっている。各学校がそれぞれの実態に応じたCAN-DOリストを作成する際の参照枠になる。

CAN-DOリストは「英語を使って何ができるか」が一番重要な視点である。記述文を３要素に分けて箇条書きにするならば、「活動」（task / performance）にあたる部分をもう少し強調してもよい。

2　CAN-DOリストのレベル感について

記述文を１つだけ見て考えるのではなく、前後のレベルのものも併せて比較することで、レベル感が見えてくる。いろいろなレベルの記述文をランダムに並べ、そこから正しく並べ替える作業をすることで、レベル感を育成することができる。教員同士がレベル感についての共通認識を持てるようにすることが重要である。

3　CAN-DOリストの使用について

教師用、児童・生徒用、保護者用があるとよい。

教師用・・・・・学年ごと、単元ごとに作成する。記述文に加え、その単元で必要な語彙・表現・文法が記載されている詳細なもの。

児童・生徒用・・文法事項などはなくシンプルな記述で、自分の現在の到達位置が分かるもの。英語が苦手な児童・生徒にとっては自分に足りない部分や努力すべき点が分かり、得意な児童・生徒にとっては、その次にめざすべき目標が分かるもの。

保護者用・・・・教師用、児童・生徒用と共通した視点で書かれ、理解しやすいもの。

Ⅵ　研究のまとめ

指導と評価を一体化させ、小中高一貫してコミュニケーション能力育成のために授業を行うことができるよう、福井県英語学習 CAN-DO リストの開発に取り組んできた。県 CAN-DO リストは、学校での使い勝手の良さを重視し、記述をできるだけ簡潔にしたため、具体的な内容や題材を全て盛り込むことはしていない。しかし、教師間、学校間、校種間で共通なレベル感を持つためにも、様々な観点からレベルを参照できる詳細が載った別表が必要だと考える。英語ユニットは今後、*CEFR-J Wordlist Version 1.0*（東京外国語大学投野由紀夫研究室作成）、*Core Inventory for General English*（British Council 作成）、その他のレベルが参照できる語彙集を参考にしながら、学校での学習内容に即した語彙・文法・表現などをまとめた別表をさらに工夫して、レベルが明確に分かるようにしていく。

また、同時に県 CAN-DO リストを利用した評価や指導の在り方、児童・生徒版 CAN-DO リストの開発と自己評価を取り入れた自立した学習者の育成方法などを研究していくことを考えている。

本研究の実施にあたり、東京外国語大学教授投野由紀夫先生をはじめ、研究会に参加して貴重なご意見を下さった先生方に、この場を借りて心より厚くお礼申し上げます。

《参考文献》

○文部科学省初等中等教育局(2013)『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』

○川成美佳(2012)「JS　2012　ディスクリプター＋言語材料参照表」外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定に関する検討会議（第９回）配布資料

○投野由紀夫（2013）『CAN-DO リスト作成・活用　英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』大修館書店

○根岸雅史(2010)「CEFR-J ベータ版への確定作業について」『小、中、高、大の一貫する英語コミュニケーション能力の 到達基準の策定とその検証　平成 20 年度～平成 23 年度科学研究費補助金(基盤研究(A)) 中間報告書』pp.245-250